



町民文芸

只見短歌会

四月詠草

大塚栄一 指導

古川 英子

同級会に出席されし九十歳の恩師に付添ひ我は着替へず

吉津 政枝

わが終の住家となりしニュータウンに過ぎゆき偲び唯に里想ふ

五十嵐夏美

幾度かわれに言葉の出で来ねば話されぬかと焦りを覚ゆ

関谷登美子

離れ住む娘の連れ来し猫二匹家族の如くなりて三年ぞ

渡部ゆき子

洪水に荒れし山川の水濁る池のほとりに水芭蕉咲く

目黒 富子

乾く程甘味が増すか簀の子より落ちし大根に蟻が群がる

斎藤ちひろ

廢屋の屋敷に残る桐の木の枝の高きに花咲き初むる

渡部ヨリ子

雪溶けて地肌の見ゆる前山は水害に土砂の崩れたる跡

新国 洋子

肺炎の夫の食事を時かけて養ふ娘にわれは及ばず

(出 詠 順)

只見俳句会

四月例会

目黒十一 指導

邦 男

堅雪や人影走り犬の吠え

黄塵や廊下外れの非常口

花曇り椎茸榎木伏せ終わる

蓬萌ゆ摘むを躊躇い佇めり

孕み猫つれて赴任の駐在所

ころころと堅雪渡る野兎の糞

残雪や峽に探査のへり低く

池の辺の遠慮がちなる露の臺

飾られし兄の遺影や春陽差す

ゴーゴーと押し流れゆく雪解川

水満々ゆびそ柳の花穂出でて

蛭蝶囲いこむよう手の平に

手廻しの電灯備え春おぼろ

もぐりては蜂の全身花粉つけ

隆 堂

邦 夫

隆 堂

邦 夫

アツ子

春曙テレスケホーの幾度も

雪解川ゆびそ柳も今は無く

ゴム毬のころがつて来し春の泥

一陣の煙西へと養花天

圧巻の握鮎在る築地かな

トラックの震動届く植田かな

洗車してのたうつホース水温む

うららかや眼鏡の傍に文庫本

柳の芽色つきそめて川の朝

春炬燵立てばする事忘れおり

停年や農の手ほどき先ず田植

さわやかや白寿の義姉と新茶汲む

青芒われに重たき手打鍬

山笑う只見川なお壺中天

又壺歩

吉 児

恒 夫

恒 夫